

■小林虎三郎 志士。戊辰戦争で河井継之助に非戦論を建言、廃墟となった長岡で、学校設置に賭けた“米百俵の計”。

こばやしとらさぶろう

藩政事件・1828＝

越後国長岡で、百石取りの藩士小林又兵衛の三男に生まれる。母は同藩士の娘久。筋向いにはワンバクな河井継之助がいた。

幼時に天然痘に罹り、あばたで片目になったにもかかわらず、秀才で、

天保大飢饉始1833＝ 5歳：早くも藩校(崇徳館)に入ったとも伝えられ、

・・・・・・1836＝ 8歳：この年、父が新潟町奉行となる。

大塩平八郎乱1837＝ 9歳：

適塾ワゴン・1838＝10歳：父を訪ねてきた北遊の途中の佐久間象山から、最近稀な人物と評価され、父も象山に教育を託す意向、

勅進帳初演・1840＝12歳：この年、父が藩主の養嗣子の傳役として江戸に出る。

師高野松陰に傾倒して勉学に励み、

阿部正弘首座1845＝17歳：この頃、藩校(崇徳館)の助教に任命されるほどで、

孝明天皇・・1846＝18歳：

国定忠治磔・1850＝22歳：藩主牧野忠雅の命で、江戸に遊学し、折衷学派萩原緑野に詩文を学び、

尊徳報徳論・1851＝23歳：

*佐久間象山に入門して、窮理の学を修め、歴史や政局を学ぶとともに、象山から道徳・芸術(科学技術)のうち一つでも欠くなと指導されて、オランダ語の修得や外国の知識吸収にも努めながら、羽倉簡堂・佐藤一斎ら一流の知識人と交友して、卓越ぶりを知られ、吉田松陰とともに、象山門下の二虎と称される。

ペリー来航・1853＝25歳：

開国開港・・1854＝26歳：

ペリーが再来航した際、老中となって阿部正弘を補佐していた藩主牧野忠雅に横浜開港策を建言して、帰国・謹慎を命じられ、帰郷後、発病して、自宅で病臥、詩を詠む程度しかできなくなってしまう。

安政大地震・1855＝27歳：

温泉療養に努めるうち、青柳剛斎に出会って、開眼させられ、

蕃書調所・・1857＝29歳：

独自の思想を展開した著述に着手し、

五ヶ国条約・1858＝30歳：

藩主が死去して転機となり、

安政の大獄・1859＝31歳：

この年、安政の大獄で、吉田松陰が処刑される。父が死去。*中央に三学、全国に小学の設置を求め、明治学制の先駆ともいえる「興学私議」をまとめ、師象山からも褒められる。

桜田門外変・1860＝32歳：

8月18日政変 1863＝35歳：

実家から出火し全焼。

禁門の変・・1864＝36歳：

この間、蘭書を抄訳して、自由に読ませたりしたことから、自宅に多くの将来ある若者が出入り、

薩長同盟・・1866＝38歳：

「藩兵制改革意見書」を提出。

大政奉還・・1867＝39歳：

抄訳「泰西兵餉一般」、

明治維新・・1868＝40歳：

*戊辰戦争で、藩が新政府軍に敗れて、多くの人材を失うとともに、藩民すべてが困窮するなか、プレーンを務めてきた非戦派三島億二郎のもとで、文武総督となり、中央官制の変更に伴う職制改正後も、大参事に任じられると、自らの企図する教育制度整備に先立って、寺に学校を設置、

初の日刊新聞1870＝42歳：

長岡藩国漢学校が開校されるが、その財政的裏付けは何も無く、苦慮していたところ、たまたま、支藩の三根山牧野家から見舞いとして米百俵が贈られると、うち百両分を文武費用に充当、うち二十両を国漢学校創設分とすることとし、いきり立つ藩士らを説得して実現、自ら校長となるが、

廃藩置県・・1871＝43歳：

廃藩置県に伴って、柏崎県の管轄の分校となり、洋学局・医学局・演武場は廃止されるのを見ると、登校しなくなって免職となり、長岡を去って、東京に出るとともに、病翁と改名。

学問のすすめ1872＝44歳：

国文で平易な「小学国史」12巻を著し、

明治6年政変 1873＝45歳：

出版。

佐賀の乱・・1874＝46歳：

*「德国学校論略」を訳刊するなど、国民の基礎的教養の向上を優先する考えで、なお教育に取り組むが、

西南戦争・・1877＝49歳：

病に苦しみ続けて、没した。